目の玉の抜

ゆ 十二ヶ条 一
え 十ヶ条 十
ゑ 二ヶ条 十四
ひ 十七
も 四ヶ条 十八
せ 七ヶ条 十九
す 四ヶ条 廿四
ん 廿二

こ 二ヶ条 廿七
助辭 廿二
な 二ヶ条 廿五
ら 二ヶ条 廿七
む 廿九

あ 二ヶ条 廿九
て 廿
き 二ヶ条 廿八
ま 廿一
ち 廿一
ま 廿七
き 廿八

あ 二ヶ条 二
ち 二ヶ条 三
さ 四 四
さ 四 六
て 廿二
る 四ヶ条 廿四

詞瓊綸五之巻

おそ

○おその結びそ。紐鏡の花。りの降く結辞ふて。一の書に出きる三結法あの
ごとく。凡ておその結びとある辞ハ。上よりをあくて切くらるをおろくハ作
ちる辞いとあるト 紐の用ふ紙こそくかくまバ作ちる辞よあくび。呼へゆけみどくいふ
らきハ作ちる辞ふるを。こそくい へだ作ちるこそにあくび 又上ふこそあくて。法の法ぐく系ふうる時こそみふ
うあくびぞとどくの二つ結辞へ法ぐくし。よろれをあくをだ。よろをどくあけ
笑くうどく。又ハ先どゆう先どるどのるどびしをどくしいふだ笑くうだいひくうど
くその結び辞へ。他ハ先に准へて考へ試むべし。他結のくるどふハ一つもなし。たうくてふをそ結
定まりの法ふるくかくのみ。又今の世結俗俗のてふをそこそも。おその結びぞう
ゑは。皆おのづくく雅俗の格くそふ。こきえおのづくく結ぬし。

①詠のなかそへ結ぶ古そ

新十六　人をゝばかりふるころをいひてまゝよゝやさ[てそ]ハ志げのそゞ岩

新勅十八　まよひこゝ芝垣のゆゝ波出なゝとぞいろ[てそ]よその志ゝぞめし袖

六帖　志ゝ深ゞもむゝ世ゝいへゞかゝてきぬゝやそ[てそ]を紫ゆゑ

新後十八定家　かゝとん[てそ]あゞ結ぶ萩の露ゝうつろふゆゑいつゝひもゝ

大和物語　こよひ[てそ]をゝゞ結ぶゆゝゆゝゆゝゆゝをきてうつゝゝ志ハ志ゝゞや

源氏若菜下　なゝき[てそ]ハ岩ゝるゆゝゞゞゝえゝ人のゆくへハゝるや宿れまゝゝ

○いひをゝそゝ結ぶ古そ

金七　ゝひ志ゝでゝろづゝに考ゝまでも れむゝバ[てそ]いきゝ結まゝ

新十八　ゝれをゞをゝ結紫をゞふ志づむゝよ[てそ]かゝてもやゝ川のみづ

後十七　なふをづをゝふ[てそ]みゝの浦ゞふこをやゝのよゝうゝゝゝる私

後拾十二　ゝゝゝゝゝやゝ[てそ]人ゝをゝゞかゝゝ実ゝ波をゝゝゝざゝゝ

金七　をゝんとたのむゝバ[てそ]ゝをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

新六　ゝよゝゝ者志志[てそ]ちかゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

○ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

百五十一 せぶ〳〵ゑ

いきのをふゑを思へど人めおもゝ［てそ］吹ほめたりしば志を〳〵あふべき物を

かくるゝぞこそ切と〳〵ハ光づし

○おそそ二つある事

後拾十 涼さ［てそ］秋ところを先まさるゝ光［なるゝぶハ同じ］ろゝめ［てそ］志光

百云 光ゑ

此山乃つきだの〳〵［てそ］この川のゝめえだの〳〵［てそ］ゝゝやむ時もなるめ

此百紫の詞ハてそを二つ〳〵ゝ一つの光ゝを結ぶいと光づし

○おそそ

古十四 石乃ゆくゑゝ秋ところゝゝ立ゝてるかゝ［てそ］そえめなるべき有る物

同十七 大ゝゝやをゝゝ秋ひもるふ［てそ］を神代のゝもおりひいづゝめ

かくのぶゝゝゝをを添ゝてゝふたゝゝ。をゝをゝ

○ゝてそ

ゝゝゝそハ物ゝをおゝをかゝてゝゝやぶむゝゝの辞ゝ。てゝのゝそゝ

ゝゝゝゝ。ぞゝゝゝぞゝゝの考ゝ光のゝゝ。三の考ぞの

紅のゝゝそその修ゝかむゝへあゝをゝ

古二 光ゝをゝ志ゝゝゝゝ

又はどてをぶ〜ぶやぶむことおるきハ

後九　人のうへ乃おく〜しいたバ[ありてそ]あれ

拾二　月にゝへてゆやゝ〜花を惜むゝ邪〜いきゝば後の春[ありてそ]あれ

新二　山ざくらおれをよりほゝ乃そもがみ花ちりぬやゝ人[ありてそ]ゝへ

後拾十　思ひちゝ人[ありてそ]あ[を]ぢ[ゝ]ぢき始〜つきゝ紅ふ月をやゝてん

みゝぐ弟はてその上ゝ[を]ゝの添〜ゝハ

古十三　うつ〜みたさを[ありてそ]わゝ〜[を]花[ゝ]美ふさへ人めをゝるとゝるゞわびゝさ

拾二　春ゝけてきかんと[を][ありてそ]思ひしゝゝ[を]ゝ[ゝ]ぢすあゝ〜ゝ〜ん

同十二　おぶこれゝゝそと[を][ありてそ]人ゝゆを[ゝ]おぶ所のまゝしゝゝめバ立しき

玄帖　月乗ゝ〜ハこねぶふを[ありてそ]まゝときを[ゝ]ゝるをゝゝへを弼ぶゞゝゝゝる

大和物語　かゝ〜ゝ[を]ゝ[ゝ]ぢ多ゝ[を]ゝ[ゝ]ぢ[ありてそ]あ[を]ぢ[ゝ]ぢ[ゝ]ゝ[ゝ]ぢ月ゞ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ

千三　ほうくきをまたりやうくとまきくれつくきくよ　志もてそ　移りきざりくれ

後拾ナシ　あげくへくへくまつふまでのこの糸よきしを　志をてそ　ケーりりるき

玉十　るの考〜既まりよのあれ所方にをやむ　志もてそ　ほくくすれ

後撰ナシ　わをを考ほをに古しくぐ位を所屋り　志りてそ　神をぬれくき

後拾遺系　かくとにをなぐまむやをくかくころもきるよ　志もてそ　ぬをまをりるき

千九　ちりぐかをかくりふりるるこぐ　志もてそ　とまりざりるを

仝一をのくハりてのをるる。ぐ俗もとまりざりるをとふをしめづし

○さてを　下に在を添るも同じ。をあをを

をに三つのりりを。一あハさるるにてをとりをを

後二十　紅ぐかをるかをりを所しとおりひきん人をも花を　さてを　ろりる光

千十三　を紅りりをねりりをふ物をやひしをを所を　さてを　をりりみりひしり

仝八　りりふりをハ美だりりかりてやをりりを　さてを　をしりりを人りりかりるか

ゆ十九　おのづりる　さてを　をりりをとおりりふまりりふ人りりををりりるる

同二十　花しをべりりを紅りりを　さてを　りりるをりりりりのりりるのをりりは

二月八さぞをかしををりりるる

仝四　あとりりやりりををのふをりりるきぐ後　さてを　をりりりる人りりりりる

千六　いりりのまりりりりりりりりりりん　さてを　りりりりりりりりりる光

ゆ八　をきりりりりりりりりりり

三よハいふとんはて物ゐる□そ

金七 あさまつ〜やあぐ□きしゐ□ゐ菜 さこそ そのろはさきとゐろも□

チ十二 ちひゑゐだわとゆゐとぐふ見ひせよ さこそ そつ〜きこゐろゐろも□

金九 菖まゐ〜 さこそ そ藩乃ゐこ形〜ゑきさ〜もおきて加つるべ〜やハ

チ八 秋ゑこの〜ぜ さこそ そ首はいろづゐゑつ〜ゑへ〜のゆはきを〜きや□

ヲ十七 山ぬゐく さこそ ちゐろゐもをまでのひとハちゐんのゐは

とはゐのさこそハ。神ゐの耳ハいまゐゆゐりがく〜。されバなゐいふとゐこと

ゑハあ〜ざれぐと。さゐ〜にんゐるゐれハゆゐりゆをゐ〜。さこそハのゐはきこと

ゐとハいゐふのゐはきこゐれバそもし〜んはて物し。さこそハつ〜きんゐりゐもハ

いりふつ〜きんゐれだはそしもしんはて物〜。さこそハ藤のとこゐ〜ゑハいゐふ藤のと

こゐれハとそし〜んはて物。さこそハゐぞの衣つゐゐハいゐふ菊のいろづゑバそそしんは

て物。さこそんを西ゐゐ〜ゐもハいゐふんハゐゐへハそそもし〜んはて物ゐし山飛糸ふ

のゐぐゐふをきをさへゐく巻ゐゐさこそんゐ〜ゑをまゐせめことともいゐふゑをんゐ

まくそをバそそしんはて物。さこそゐはぐふちゐさこそ物の衣ゐ〜めをそ〜ハのとせ考

の山尽こをといゐふのゐぐふちる物のをゐれで

そそをとんはてゐくきこゆゐり

ヲ四 ちゐひゐ〜 さこそ そ藤のゐぎゐ〜ゑ中ぐゐゐ用ゐ独のせで記て

とはハきそとゐ〜をゐる之ゑ。そゐいふ考のゐぎゐ見バそそしんはるゐ方ゑ。ぐど

ゐ〜〜いつをゐ〜てをトゐ〜のゐを会かのゐゐり

ヲ十八 人ゐ〜ばおゐふゐゐろをいひてま〜ゐ〜や さこそ そゐづのをで考

こをハトゐのゐを物し〜ゐれバ。そゐそのゐも定めぐ〜ゐ。ゐ〜やいゐふいやー

き考をえいんゐハいとゐを見バそそも見ふゐゐる〜〜とゐや

〇さこそ そ下にその伊ゐゐゐを用ー

ち十三 うつ〜ふそ さこそ ゐ〜ゐ考ゐ〜さへ人めをゐゐとゐゐゐゐびーさ

廣和十 あふゐそそ さこそ 人ゐ物ゐゐ〜ゐめゐゐゐかゐハゐをてゐ〜ゐん

チ十六 さこそ そ経ゐぐむべき考ゐ〜ゐ〜ゐ称ど伊ゐとゐ記ゐふやゐる用ゐ邪

廣和十八 ゐ〜さは さこそ あゐ〜めゐふと又伊ゐきかゐふも考ゐぐゐゐん

狭衣

うれふしハ　さもてそ　うつし給□名称りたつる什あえ牛をかうしかゝるぞや

件のうつしのことをハさやゝかふをとゝつきし

金七　美うしぶかうやとをうるしよ　さもてそ　そうつておつゝき給ふゝうりうと

拍十六　さもてそ　を遊えんこと給うとかゝめうるすゝとぞとぶいつふ人乃あき

後拍九　さもてそ　をみやと給ふかふやどりせ給ふゝて春々きゝまゝうゝ給

同十六　さもてそ　をゑゝらゝべうゝまけゞゝ給をやくをとゝし弱のいつし式

同二十　さもてそ　を宮をかゝうゝめをみよゝ給松さへ枝ゝ有に久ゝる久

金三　さもてそ　をみやと給しき旅ゝうゝめ素給をかさへぬゝて神ゝ仏一

拍八　さもてそ　を同じゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふゝ給ふ

うゝうゝハ上のさゝその中給いふゝとゝ給ゝ格と同じゝをゝて。さゝとゝてそハあひ

えんゝこのかゝうゝめハ。いふゝふをゝんゝこのかゝうれバゝてゝとゝ給て給ゝるゝ

後九　のひもえぞ給ぐきゝもをあぞ有ゝ時かりふゝく　てそ　才にあうゝゝ

後拍十四　まゝ給やをゝゝ給給破給ゝうゝせゝ給給給　てそ　かゝくハぬをゝゝ

金三　有給乃月もゝうゝの庵ゝ給ゝ波ぞかゝり　てそ　よゝとゝてゝゝ

拍十六　花ぞゝ給給給　てそ　ゝゝるに給ひゝゝゝ給給給

後拾七　志ぬだかりなぎさ水　[illegible]

まく

同十九　たゝちよりハたかゝるそて　やゝ水しらこハいづこ吳三番ゝん

[illegible]ハ冬づゝ。さきどゞ同じ[illegible]ばハ格ハ同じ

[illegible]

[illegible]かゝ[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ぶ格。三格の用ふ立て。[illegible]後の[illegible]ハ一の

[illegible]ふ。今又別ふかゝ[illegible]ハ格[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]

[illegible]

詞後撰
八　かとふ　てそ　ぬくたきつ　秋霧の袖ぬれぬる玉川のせき

同十三
後京極殿　ちれと　てそ　あづ老あれふし　山のふもとを紅葉あり明の月
こまつはしと文とれそも切まどして雅下詞云へつきり
まく

古四　秋の歌とあ　てそ　ふをかしまむ　おくふむ　はるぶきで

同五　春の来て鶯詞ねき　てそ　よるかしし　山のふしきはあをばうれちる
こまつはかしと結ぐ　しくいてるるつ　又

後拾六　かりそん　てそ　よがきにきしぬる雅なるたやの池あうえぐりせて

詞一　はのぐと春　てそ　庭ふきふきし　玉結かぐ　山くすくるあるぐく
ちまつはかしと結べ
まく

後八　ちちり　てそ　今はちしもみよ　世の山はくるきつせ雅もはまく

こまつをこらしとと結ぶ　しらしと結ぶ格ハ一の末三鶯の次ハ後京極殿ハ出せり　公ハその下に上の所にあるを

○をと結ぶ格　をハかのをとしふをこのをあを

千十一　よををいりこハをゆるるあるふ　てそ　ゑせバやとおりふ袖のゑぐくを

後拾十　ちちに　てそ　人のちちをうつちをふをゑせる山ばちちり邨

西行法師後撰　美り　てそ　みやこ結るもゑるべきを袖ちり波ことちちはしゑぐ
まく

詞千十三　ちちふ　てそ　かちしし　袖をいうあしてあれはうしたあうしたみちん

同十七　ちしど　てそ　はちへし　袖をゑぐ才よふなどとよぐむちん雲はあぐ川
はこ行八間ちちは　ちちはバ上の石と文をぐ切まどして下へつく格ち
とかるつ

○ふ結を五

新拾遺集

昭君をば法皇の御くなりぬ女房人をもとどめ［て］きんと思ふ

金十　いふしへをもの［て］あるべきにあらず今ハ日数まつ歌ありけるを

こまつくの元方かつて。かのをとこいふことにちがへ。又今宴の方ハ間ふ志めど

つねなばと。志と更ぬ。切もとどめて下へつゞく撰る人。又志めをもちて三てもよ歌あり

○［　］と云る格

後十八　世にいまさるを［て］法皇にも歌をもとめ奉るべき歌乃ありけ

千十三　をがる［て］藤原の家に入しをも難ずるなりうつくしきせで

拾遺十七　元良親王

つくる［て］人をもとめ［　］宮川にしるゆゑ人をあはじとぞ思ふ

後撰十四　ちる［て］ちぎりしまゝにふる月日をもとめ［　］

○ゐを又どと云る格

後拾十九　伝法ある僧のもとに［て］あらぬゐをもわるきゝとゆハれまん

新十四　和尚の御ゐ乃歌ハ［て］あハれをもとめ［　］

後撰十七　恋部　うれ才［て］ゆかしゐ陽り志げめをも［　］

後撰十三　かゝる［て］ふるかゝせをも志ゆ歌の月をぞ人を見るべうりける

後拾十三　垂板をつづるぢと［て］笑しうどもろづゝ詠ぞ有ける

玉十二　乳母

ちぎりこゝ志［て］ゐハぞありぬをど宮ハ歌ぬまゝ中ゆ歌

源氏　ゐ日ゐ

ちゝろ［て］うきよゆ出家ををるれどゆくへもしらぬ海士のうきを

○ちそのてふをはうゝのそぎる所

後十六　ちる花てふ［て］法ゐ歌ゐのをかるや人をありふるらん

新拾遺十七

かりゐ［て］うゐおくのゐとゆ出とうりに成ぬそ人や稚まゝふん

ゐ志ゐの歌［　］を

文ゝる解ゐし

○ゐの部

六帖 ちぶりといひてこざるしよりもとしをしらばまくぬーも [こそ] まつのまさかる

拾遺 月記 業代をよぶる山べ乃ぬのこ [こそ] えだつくふるよりひるべし

業平 あのかすり わりもしをしー 玉をくへ出ふかくこれどあみぐのこ [こそ] 袖ふかくある

これらハ詠び詞

伊勢 集 うーぬもばうすもやせんと思ふ [こそ] うゐぬねよりもこゑハとびき

てそとかいてきと詠ぶ日本紀の歌ハ例あるべし古くよりこゑこゑハ絶てえしぞ。ぜよかくぬのこ。

風十 ちてとうもとハもぬゆくハまくつしし美をれと [こそ] いひ。ぬうう

ちもハ下にもちのし多て切もざる様ーをづもざれを

様らくのそぬ言ちつと

ふるの歌 いうふことは美そーのこ [こそ] なるひきそこうて生をきこよひるり乃也

こもハ乃也とハ巻りこれた。こその詞乃也とこへハかくらぬ。ぜよひるこそ

ぬ乃也といえどれぐるまぬぞ。ーー又美をのこそといちぐ。三のるをるーひきつもとや

うにいそぐれぞかるぬ。ぜべてその詠び詞ハをてもおき歌ようて。上のてふをそとら

きりそぐるこ。先をさらるべー。初学の人の為ハ例得りつよにあるとべ。

文とりれ。ふかもとれ。ぬ乃系乃みそれ [こそ] 神やうらん秋ぬ也ぬ

こもハらんと詠てぐーもぐてるのこ。間ふ詠ひのやあーこ。あもバうーきぐ

てるり。ぬるに代ぬ言ぬ。ぬかるハぬるこ。ふらんぬぬるぐる。

たの歌ぐもいづもこもてそのそーのひるろー。たくこそその詠びを。上

ふりぬ歌たるぬく。三階の歌。系を稀くあるこ。ぬもぐも。ち例ふをぐ

もてみぐりにようもうれを。ぬ。ぬぐーとりるぐし

と

○ニハ並べく切る語を次ぐるてふをそ。ぜる在ふ。上のてふをそ詠べの

○玉詠を五

ゑを。大うさとより下へハ及バざる心。格をもに格くの格あり。花ゑ[illegible]をがやし。

○定まれる格をて切ちる俗をつぐらると

後拾六　おなじくぞをつのらん　と　おり人ぐと名好る古やをハまゝ　でうう〳〵

金二　いなり山〳〵づまやえまゝ　部〳〵まゝ　ふ志う〳〵のあき　と　かり人ぐ

古一　吉やうき花やおそき　と　きゝとかんうぐひをぐふもなるぶも有る名

同二　ゑとええし志とやう　と　さう〳〵苔ろふるまち乃てちゝぶちゝぶん

同八　えぞしらぬゆちろえよ金ゆゝば茲やとすゝ人やとえぬ　と

同十五　ヨがぎく氣をれめうん人もゞみさゝとやうに　と　よをころうん

同十七　かぐえやまいざ志ようてえてゆかんうゝへゆる身ハおいやをぬる　と

後云　秋のゆうゝおく心毒をりさえきバゑやをうる　と　おゞろうれつ

古三　ゆゝ川乃山ほうゝぎをうをへてゝゐをりまんる　と　孫をのゝぞ明

同十七　位ゆゝ孫きゝの初め素人形〳〵ばいくゝより入ゝ　と　とハまゝ　孫き

同十九　身はをてつゆゝろをぶふをちゆゝろまでつひみハいぐまる　と　をる居く

後三　うゝとふてそ花をゝとえ花　と　まん人のちぬ物ゆゑふ惜き志邪

右のゝあひ。上りそのやゆこそゝ。おゝくその定まれの孫び辞ゝて切

ゝうる。ゝくゝえてづきゝるゝ。ゝたゝ上ゝの下のゝもゝ。ゝふ進へてゝをゝべゝ

○定まれる孫び辞の格をゝゐ心へてあるると

後十一　みるあかるうゝぞゆうゝこにゆゝ　と　きくたまゝをさへやあゝはうづゝぬ

撰千六　かゝゐ孫き志ゝ今やゆうを身　と　あゝむをバ格をゝぬゝ家ゑ志ゝ志

新千七　うゝゆゝ多におゝひやゝゞ　と　ふる星乃ゑふ志ゝてとゝ好る志ゝ五

歌合

拾二　ゑゝへぬ松と外ゝゐ赤のゝ様いづゝと久ゝ　と　ゑのゝゝ格ゝえん

後拾 十一　たく山ぢ高木の梢高のぐさゆる雲乃いつうべ。[と]　[　]

古今 いせ物語　いづくまでかくりはしつ。[と]　人とぐつうぬとりれのあらぐ川まで

右の歌ども。上なぞや。何などの詞あるまで。その結び詞の格をもあがへて。うつ。

此格、をべてこのうの歌ハ。うつ。流。さあれ。変調のうくべよ。ぐひて。よくも。

もゆまべし。さあれ。和歌の言会に。おのづから。ふまやかふ。ふハぢバ。あまハ。

なぎ。べきうみくふ。あとあ。あふまやうふ。いつる。極。めぐ。のもぬまやあんと。

後撰の判。ハ。ハ。ハ

拾十三　ふゆゆゑ　□　花のしもいまぬゆゑにふまちぬ　拾さい山　拾乃月

たのうさぐ　社橋ぞ　もいづとも　上のてふ　そのうのひハとの下

へを及ぶぞ

○上のてふをはのうのひ乃と　社下まで及ぶ橋

古六　ふゆゆゑぞ　本毎月　花ぞ　咲ふ　いづを梅　と　分て　さ　し

□

□十六　ふゆゆゑよ　と　ふさけ　ん　さ　の　う　川　みさ　と　ふく　咲ふ　拾を

□

後大　いづく　と　てたづ　ゆき　う　ん　む　う　づ　わ　を　ふ　む　う　社　ふ　ま　う　な　く　に

□

拾十一　みう社　ふ　う　て　ふ　う　い　づ　川　いつ　ん　き　と　て　う　ま　し　か　ま　う　ん

□

月十七　時　し　ま　ぬ　山　ま　ゆ　じ　社　ゆ　り　川　と　て　う　か　の　と　ま　で　う　に　雪　の　ま　う　ん

□

六帖　きの　ゆ　き　て　う　う　ひ　ぞ　か　う　社　ま　ま　い　く　よ　へ　ぬ　と　う　社　ハ　ま　ま　づ　う　ん

□

社　ま　ま　び　社　う　と　れ　ま　う

○と　二つ三つ　ひ　う　ま　う

古三　ひ　う　う　う　と　ま　ま　ま　ば　ひ　ま　ま　ま

同八　ねぶかの　と　ふる月日とちぢまるなまみたるとなるうきく

○うとと　とのと　うとハ雑字なれ共

金七　たちあがるきくう　と　ほのぐぐ　なごろもぬぎすてて　と　そぞろ思へば

秋十三　ふの名をバ人をまれにちせ　ふ　ちり　と　孫なまり　ぬきいとうひの月

かぶろ　日記　ほのぼのと　ねくらぬくもる　ふ　ぬぎすてたるふ　ちり　と　うひやあうん

堀川後百首　ほぐもこがほのぼのとあり世ぞさろ　と　ほがあまと見てはしぐろきの橋

同　あうかく　と　年も及びて　まとめこがもはちぐさを淀に見せま

抑　ぬぎすてを置きてどくいたつみてるもなきを　右のぬく　洗ひうとを置きてど

いつるぶといやしげまそ　ぬぎすてるぬ　ぬぎすてるぬ　ぬぎすてるぬ

○一つのうと

後十五　あしひきの　ふうとかしはちぢまるとを　と　を

後拾十一　いそぬまはまぐさうじかしぐりかくわぐ　ふべき人をうれ　と　を

秋十七　たくふ乃ちきはちうとにうべえよいづとうあはまうと　と　を

後拾六　むうしぶふ　ふるはちあはあ秋乃月ちぐぐりのいくめぐり　と　を

こはうのうとへつはの雑字のうはちうとを　ふ　ふの　ふうとを

てとハ　ぬ　ふるふとをとうひてるたうハぐうを

○一つのと

古十一　ちうしぬきおのひやあぬ　と　わしがきのまちうれたうつふうしのあき

はぬぐとハしぐぬぐうとうとはうとうしはぬ　はとかよ例字しづとしき時ハ　古作しハ

ふぬぐしきでとはかしうしうしぬ　又後撰十巻刈ちうしき思ひやあぐとうしぬ

の移ふあうまふのうとをうとしきと上二句合くたのちうのあうはぬ　但しこのハ

ぬぐしく移ふあうしいふうしうたふ　ふうあうぬつのうあり。

同五　ぐきうつる方とちうまぐうしうぶ山あうはこのんのちり　と　まうふふ

君く　ちうしうとうちうちうきぬはちうしもちうと　と　まがふふうちうと

○五のをあ

仏之と名づし

○一つのうと

後十七　ことが米名ん有りかつハ侍しとみ山本結ちり　[うと]　こと[illegible]ぬかて京ゑせば

月大　よのあらはいさ　[うと]　いさやゆ[illegible]結ぶ者ゑ秋りゆ[illegible]ちこそ[illegible]れ

ゆうとハ風ゝ[illegible]をまつて[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ

○おかよせ　已上。切〻格乃辞より有るが定まり有る。切〻格の辞しハ
[illegible]の辞多り一二例をいへ。つのとろ〻ぶし　ありこやう　ふらく　よさ　ハく　いふ
が定まり不て。つのとろ〻　おきとろ〻　とハいそど。つのとろ〻ハ切〻辞。おきとろ〻
へろ〻　知　又　あるきとろ〻　おりきとろ〻　つぐ　定まり不て。ものしとろ〻　ぶる
ものとろ〻　とハいそど。又　ものとろ〻　ふるとろ〻　といふが定まり不て。なるろ
とろ〻　ふるとろ〻　とハいそど。又　あくとろ〻　いでとろ〻　といふが定まり不
て。あるとろ〻　いづるとろ〻　とハいそど。かもをべてあるとろ〻に有ざるへろ〻ハ
べし。近き世の人ハ此ものぢ先を詰ることつよふあり。後撰物語三　ものとあにあるとろ〻　きけ
いづるとも　いるとも　ども　はるまぢ　ゆきよの月不昭　同十九
あき月もとさ　ふ。此歌ハ　ものぢ先を詰ることつよふあり。
の[illegible]の[illegible]の[illegible]

たゝ[illegible]ることくとをきハ今ハ出さぬ。[illegible]ゆうさけとき上のとの紀ふ出せり。さて淵るか
ゝ代ものどもものどもとゝふてゝを

古十二　祢ふあきて[illegible]ぢふものどもすゑ[illegible]ゆきふ〳〵社とゝぐこゝへん

同十八　人ゆゝを里をいゝひてものどもなゝけみやこをゝ紀ふゝゝを

後十五　身ふちかゝきふゝる地をゝゝる秋をばよをふおりひものどを

古十六　つひゝゆゝをとハかひてきゝものどきのふゝふとハ忘ハゞゝを

後十六　むさゝ里は社ゑづをゝゝをものどをゝゝむゝさゝハゝゝびよき

千十七　ゝゝゝ山花をまゝてゝ久ゝゝゝ紀ものみやこふ年ハをものど

此ものハゝゝその後びのものと一つゝゝ。さてものどもものどハ。ものをゝゝゝお対ゝ

辞ものゝ。

此ふのゝどどハものゝゝゝもかゝ

を

○[illegible]ねのをハものゝゝなゝをバ出さぬ

○やを紀辞ふおゝを

古十三　人ものゝさゝれをゝきふ[illegible]をゝゝれで苦をいまもものゝを。をいをん

後十九　社ぬきてをかをハをゝをかゝてゝゝをゝゆゝとゝふひゝきゝゝを。をゝん

拾十　ゆゝをを紀ゝゝふゝゝものをハをゝゝゝゝゝゝゆゝをふゝけてゝゝん。をものれ

後拾十五　ゝゝゝ紀ものゝゝまゝゝゝいのをゝゝ大ゝ造ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。をゝよ

玉三　五月百[illegible]月のゝのふゝ百ゝ乗ものをゝゝぎをゝぶさやふ。をゝを

古四　萩ゞ花ちるらん小坐敷寂寞しぬまて。を ゆうさよハぬくらも
月又　立ぬるらんて。を ゆうさんのみぢゞく雨とふるもあハまさゝじ
月十三　ちひしくばきゝふ。を おもひもしらぬ袖のなみたの秋衣いろふいでぬゆゑ
拾三　よすがらんて。を ゆうさん秋乃月こよひの光ふきなかゝおん
月　夜きくて月ちるもてきぬきぬゝもをりて。を ゆうん秋萩乃笠
拾十六　ちがゆうちるんつ。を をゝん伊勢山雲おかゝそ雨ふぬるとゝ
□
○ゝちのをけさのを
古四　ゆゝちのゝなゞむるゝちハ女郎花わがさむ宿ゝ徒てゝんす 沈
月又　秋のきくあちふゞちはゝゝてん花ゝちさきゝゝぬるゞ才 を
月十　秋ゝ月ど月のゝつゝけみやハるゝちゝ沈花ゝちゝゝゝだかゝ を

月十六　ぬひゝゝゆくゝさゝハかゝて笠ゝゝくぎきのふゝとハ思ハざりゝ を
月十七　ゝゝゝき城あゝつゝまんかゝちゝもたゝゝゆゝふたてゝいゝほ を
月二　雲ゝのゝゆるゝぶゆる を ちゝゝひいゝふちゝゝゝ姫けぬゝらん
月三　反けぬゝまゞゝひゝゝゝゝゝ を 雲のいづゝに月やどゝゝらん
月五　ちゝゝ雨けぬゝゝゝゝ を いふゝて秋の木紫沈ちゞにそもゝん
月十一　人の才をゝゝゝゝ を ゝのちゞゝていゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
月十二　やゝゝやゝゝひちゝゝまゝ を あひゝんゝ秋光ゝゝけ倉ゝゝゝゝ
右のゝゞひのをハ月のをゝいふゝゝゝゝ
とふをゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
○ふ又雨ふを
古六　花月いろを雲ゝゝまゞゝゝゝゝゝゝ加 を ゞぶふゝへ人のちゝゞく

後拾八　みやこいづるくさぐさかりぶをつらねをきて人を[を]とれすゝらハ
　　古々集の詞書をもけをつゝ美紫式部をも有

○一のを□

古七　ゆゝしらしたゝ部なるゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

月十七　ぬきみだる人て色をみるにしたゝむ社まれくもちるゝ社のせゞき　ホ

後七　秋の色社ホ〳〵きのゝぢとも見るゝ所多るき春をそめゞと思ホ

百十五　せゞ〳〵ゝ　きゝホ〳〵ゝ社ゝ社ゝ社ゝゆゝ人もが色まくゝ語り社乃ゝゝ社ゝん　ホ

新三　月日乃月をまゝゝぬ　ホ　出ぬ色ゝ社ゝ山ぬゝ社ゝ社ゝくゝゝ社ゝ社ゝ邪

月　色社おもはまゝゝ社ゝぬ　ホ　ゝゝ社ゝ社ゝ色ゝゝ社ゝくゝ色ゝる月ゝゝ

ゝのたゝひのホ　ホ　ゝゝ社ゝ色ゝゝ社ゝ社ゝ

○なくホ

古二　ちゝ〳〵ゝ色ちゝ〳〵ゝ色ゝゝんちゝ〳〵ゝ色ゝ人のきゝもゝゝなくホ

月十八　みちのくゝ社ゝ色ゝのぶりゝ〳〵ゝ色ゝ社ゝゆゝゝゝみゝゝゝゝんゝ〳〵ゝ色ゝゝなくホ

月十七　ゝゝ色をゝゝもゝゝる人ゝゝ世ゝんゝる砂の社ゝもゝゝ〳〵ゝ社ゝゝゝゝなくホ

月二　ゝゝ百ゝゝホゝゝゝゝ

○一つの水

西四　うら秋乃うきへの為ふむ[illegible]り尾花が風　水　在行月新

同又　ひとうら在そのうさ　水　雲行　契かきわはつるのうらさびの秋

同十　うれ〳〵きふうれそひるなり〳〵ひるまちえ〳〵青　水　今の為後

あ〳〵にこまてうきとし二つるをひしろる間みきめるふり。いやしぎう

ゆるるおしし。又俳てるてくおぐ〳〵。風雅又後糸拾を抽出へ〳〵ちるるざあします

ろうう為〳〵ふ尺水さを〳〵うれあ。けるがひをろかぐ〳〵。月又糸のあくを

いつるそ。月〳〵糸〳〵をあぐるいひそ〳〵るるハ行〳〵ぶればう。

○一つの水

同一　ひて〳〵ざるいぶやまでふたまりてうとふ多の為　水　かぎ〳〵ん

新後拾八　秋　水　月〳〵後を為ひも世をあぐ〳〵為のをまる屋の為〳〵為

けるぬひの水り〳〵ふいやし〳〵く笠。秋ふえ〳〵おどハ近き安ふハけるひ乃

ふひにありぬをと。古き為ふハ尺てうてしごきハ出秋えし〳〵いべきあを

○夢水せん水　四の為何の為り出まり

○かの水　四の為かの為ふ出せり

[illegible]ふをさてハりぐたく〳〵。やむて〳〵えぐハ秋えて〳〵〳〵をいをあ。式ふ乃為を乃

為ふ尺を為ふふをきき八ぐハ。かをそて為のを為ふふをうをればを墨く

[illegible]

て

○ひてものてハむと為ふてをあ〳〵

□□□□□□□□□□□□□□□□てがあてきて

○てきて〳〵てをてよてんてきんてます〳〵てがあてきて

右のふぐひのてハひの為用し。ひて為云の為つるの為り為く

いふを考ぬべ〳〵。てきて〳〵いふ時ふを為りてよむハ為ぐて〳〵し。為ぐべき

ふを為ぬべ〳〵。てきて〳〵いふ時ふを為りてよむハ為ぐて〳〵し。為ぐべき

○西行ふを

後三　かくあがりちりてよし紙やとけて［て］ぬ花のうきハもみぢそこるべ
ひて　ロ　ひて　ロ　ひて　ロ　

古十八　今さ〜にうゑべき人もおもゐしぞ八重むぐら〜て門さすり　てへ

初十七　むら〜よるとみえしきやどのうゑ柴も出の布にてそ為うゆる　てへ

同十八　あのうやゝ為りうる　てへ　でうる砂の毛上ふたてる初もゐりうり

六帖　ちひ　てへ　でちらぬをふもつのうれくふあやゝしくまぐふもがんうれ

こゐ〜ハといへをつゞめてへ〜いてるしとつあを待で為て　てよ〜ゆふまてん

わぐし。ゝてこゝとハての砂ふへべき詩ハ姫をたちりく〜てりにうてこてふへつ

○てゞ　三の巻ゞの砂〜出せり

○てよ　五の巻よの砂ふおを

○あゞて　四の巻伊の砂ふ出せる

で　濁

○でハぞ〜てのはぐ〜まり〜る詩し。つものでふとるとるゐ〜

○あで　けあハなんあゞ砂あと一つ出て。去の巻ゞたるなり

古十三　ゐる色かるわが身をうゝとちらねばやうを　あで　海士の足るあくうる

後十八　かひもなき苔衣松うり花たく高のなゆくきえ　あで　為ゐるゐん

拾八　うれよふれゆきかゐを　あで　うきゐりゆるハゐひ乃ゐりふを色ゐる

新六　中〜にきえハきえ　あで　うづゝ火のいきてうひおき浜ふを秀う邪

同八　おり人ゐりゐ〜ゐゞりにまうひ　あで　立おゐをゐる春仕ゐゐを

同十五　ほ〜かゝゞ為〜きてハ日をれ　あで　そへてハなゞちゞ〜んおき

同十八　つきもせぬゐりゐ砂まふもまゞ色　あで　れいてうへまるかをのつきをさ

同十二　りはやく行るゝ舟いそ屋ゝ見ゆるし　なで

金葉三天の川　如へさの舟に法みでのりぶ〳〵で船もあでゝ
のさゝゝ

な

○きりな　きりしな　忘な　[illegible]　だやな　[illegible]
かゝもな　かゝしな　よな　さでな　[illegible]　かゝるな　つゝしな　ちきり
きな　ゝちぶひ　ゝ　[illegible]　[illegible]
きこ　少　み　[illegible]　[illegible]
[illegible]

後拾十三　人ぶゝあたのゝがゝさは雑俳ゝ　ゝ　ゝ　紫の　な

同十四　芳年にな不有明乃つきなくてやゝふまぶゝをとハぬ　な

拾七　秋ゝゝ　ゝ　ゝ　な

後拾八　天の川　後の　な

いせ拾遺　いゝ　な

とゝ　ハ　な

○なで　三の巻で　なで　なま　なん　なでや
の終より出　終り出

なの数のなゝぬの　ゝ　去ゝ　ゝ　云の巻のぬ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

後十一　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

けおも同じ

○雲のえの

古十一　人をりる我をたのや　を　花ちるきなとうぶふ出て恋しもつるん

後七　いづくふ春を敢なるんおぶつう　を　四ぬかぎりハ秋ぞ忍こん

拾三　えこぶ〜秋書まんよひの秋風ふ系さへあや　を　人ぞ恋しき

けおハ猶いとをり〜をぞ〜人をべ〜

○勿れこの

古三　夏山ふなくほ〜ぎとんつ〜ばね忍ふ系ふ夢　を　きゝ世そ

同四　り〜ふさ秋笠の紅もふ〜秋の空に忍ひるまん人　を　とゞ絶そ

新九　ちぶ〜さハいきのまん系まさをを扇乃風　を　ふまれそ

古一　春日野をりふハ　を　やきそわる草秋つるをこのわり系もこのわる

同　山をかを人をもをさをぬはふ〜をひ〜　を　ふびそ系ふをやさん

同五　ちひ〜くぶをえてを忘のぶんりみぢ紅ふき　を　ちしそ山あるの風

壬二素盞嗚のひ紅のお系とをえてふ〜んを忘〜〜〜ふぶきそ。けふハおりぶ

のふき系わ〜〜ていふぶやすぬ。い〜〜をぶきそふいやぎ定まりン。まる

万七　妹ぶ乃ふふとぶ袖ゆ〜ん本ろよをいぶ〜ふ月ふ雪　を　ふをぶき

同十七　系なり〜と　を　ふびせと郭ふわんさ月を玉城ぬうさ系

こをふ〜ハ下にそりぶ系。けふも系系ふハけ例系〜。古をよりこをふをは

ふ〜ぶ。万系ふハ。その下へねをふ〜ふねといふを多〜。七の巻古風の紅

ふ山ふう。十七の巻ふふハ。系もふふ山ふ。ふをふ。保氏物

俊忠兼下の紅ふふ。ぶきぶ系ふをのふまひそよとふり。まる

万拾古　ちりやゆ〜いづ〜〜ふ系の紅のこゆゆ　を　のふそやたをりそふ

まく系

こをハ下にそやとふり

まる

○忘れをを

拾十六　花の名をつらねてよるさもうぐひすの枝ふまぬ　み　ふきそと

元浦集　春ごとにたち　み　みよりそうすくこれ綾とよるゆふ山ぢさらくに

こゝろ〳〵ハなを二つ三つ〳〵。一ハ下ゆ　するいろ。又ねきの方ハ。その下へもを係

〳〵りけ例を六帖ゆ。宮なふりそを風ふきそもをどをされどゝもゆハ万葉

の方を直〳〵て入〳〵ゆて。実ゆ〳〵けゝび

ま〳〵

古二　山ぶき　み　あやな　み　さきそ花ゑんとうゑきん人のこゝろひこゝろくふ

ゝき八なりで二つ三つゆりゝれた。上のゆハ方のそなれバ也〳〵ゆし。けゝの二

の句を。けゝやなく。さゝそゝきゝゆ本けゝ。写〳〵ゆし。

○云帖ゆ。けゝがせこゝがゆりゝ方ゑゝつゝなをゝゝらんはき月来にをゝたゝゝがきそゝこゝきハ

ゝを畧きて下ゆそゝとのゝいゝゝ。ゝみ〳〵き私ゝゝゝ。下のゝハ畧ゝゝ俤ゝゝゝゝ。

上のゝを畧くゝゝハ例も程ゝゝゝゝ。けゝハ万葉十三を立て。結句雲眞田名引

とけゝを直せゝゝ。ゝゝて夫木原仲臣ゝけゝハ万葉の方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝきそゝゝ。ゝゝて夫木原仲臣ゝけゝハ万葉の方ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

谷乃つぢ。ゝ。ゝ寂蓮。牛のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝたのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝ

万八　春はまづ[こ]ずゑをとこそ[こ]ゝ我ぞまづ[こ]ゝ一枝折よ[こ]ゝ

後文百十　天の川せゞ[こ]ゝ[こ]ゝ[こ]ゝ[こ]ゝ

古八　さか山のゝ[こ]ゝ紫ちりぬべ[こ]ゝ[こ]ゝさへえよ[こ]ゝて[こ]ゝ[こ]ゝ月ゝ多

同十四　かゞ[こ]ゝくに思ひたゝ[こ]ゝ[こ]ゝ[こ]

後拾十三　みちのくにをぐるえにはやこまをゝんふゝ[ゝ]ふまぶ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ

万十二　ひづるうぶき[ゝ]ゆゝ[ゝ]ゝ[ゝ]ゝ[ゝ]

拾十二　春はあけぼのゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

新六 なぐむきばとがゝ山のそふ宮もろ〳〵みやこ鳥人よ□いまたゝん よ

狭衣 早瀬のそこ鳥ゆりつどと成る紅とゝのぎの袖よぬきもつくへ よ

こゝろ〳〵ハよ□二つゝて。上ゝハ呼出よ。下ゝハ作ゝるよし。○玉柴十なきあぎ
きゝと人こひてなぐゝと呼ひ出よ□□メ芳のゝたゝかくきゝあるハゝ紅ゞとし

○てよ

古今 ゆさかゝ山ゝ紅葉の川水のゝ〳〵ちゝ葉もゝ〳〵かぐらゝ てよ

新十三 たのゝおかんゝでさゝうり紅ちぎりかてゝ紅よの中は美ふゝ てよ

伊勢 物語 義経に忘れぎまゝりぬあるはがゝとゝなぐつる実を今ハや先 てよ

新十一 いせ集 なるはぐゝみぐゝかき芦のふゝ〳〵のまもゝなぐで世界をゝ〳〵 てよ

後拾十六 いのゝきんゝとハ義ゝてかぎり でよ さゝてゝ世てふゝてゝ恨々を

詞十 かくゝてのゝよふゝ有明乃月ゝゝゝばゝをがくゝ てよ 天降る神

万二十 はゝゝぎゝとゝてにちかくゝをきゝき てよ るゝん後ふゝゝゝゝゝやも

○とよ

古今三 やよやまゝて山はゝぎ次ふとつてんゝれ芦ゝにゝゝゝゝびぬ とよ

万代 ゝゝが妹ゝが志のびゝせよ。とゝ芦ゝ紅いとにゝるゝゝゝハとかぐ とよ

新勅撰 ちゝゝ宮山路も見てゝぞちゝふゝゝゝこゝ社より来ハゝれゆくゝ とよ

金八 あゝさまゝやこハなふぐゝゝゝゝゝ

狭衣　日ごろ　ハきせ　よる　いろなぬを衣よりそめるかゝにおくらゝびやゝ
日　かさね　よる　おりひきえんをんぞうりうも立おくまてハくもゝぐらまし

袖

後十　おりそんと枝先したるを物をなきゝをたてゝだゝかゝを　ね
拾十又　いふことはんうもゝ〳〵ひつくゝうもさやハ紫りし立をて　ね　と
後十三　うゝれ　ね　といひ〳〵にうの心ゝをまでとハねをつゝき袖ゝぞ有りふ
日十九　君が代を鶴の形ゝ〳〵いえてき　ね　うゝぐ先をきよゝうゝかひとをく
拾十一　あふゝ代月日にゝえくまり時をりふり来ゝあり　ね　ゝぞ心ふ

日十六　春ハ花のゝきまにふきをて　ね　ゝ紅なぐ心ゝなくてゝゝらへく
新十一　ゝ紅をよゝたえるぐ光ゝし　ね　なぐ〳〵へぐ出ぶることゝよりゝりぞゝる
日十二　きえん　ね　〳〵で出ぶの心乃ゝ出よゝかゝ侍こゝろゝあゝとをきまぞ
此袖ハいとやゝ糸ねの活用ゝる辞し。佛もゝる辞し。○新後撰十二ゝ玉葉十一ゝ出る歌
ゝ合定家ゝ出ゝるぐゝ出ぶ引ゝすゝ袖よゝと。よを添てよゝある。笑ゝくゝとゝうゝぐ
○さゝね　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　こゝゝ八古ゝ系ゝこゝくゝよゝんゝど。七の光ゝ古ゝ出ゝる

志

やゝを先辞

○やゝをめ辞の志

古一　ゝゝぐ〳〵源くゝそ先て　志　をりきれぞ消あへぬ白ゝ花ゝゝんゝん

円　年ゆきでよりひさおいぬ志ろハ行きごゑを志ろれで相思ひもあ〜

円二　まてといつのみちくで志ゐる相あ〜で伊を稽ゑ〜かりひまそあ〜

円　のくらかくちるぜをそでくれさく〜宮主てよの中まで志ゐ（の一本）れで

円　妻あ結あるハなるぐうちくるち〜花ちくそ〜まぬ人志なれで

円　いい川までうみべう〜ん心のあくがきん花志ちくびでちよもへぬ〜

円　蔵法乃ゑくに志ゐまる相あ〜でわまうぐひまふおそ〜ま〜やハ

円　ぬく〜雪とたかのあと志ゐ春うせでみやがらまのゑをえまや

円　ま〜ゑぐとらぐ海〜ゑくにまゑ結うるそう〜志ゐ〜ちぬ〜思へで

円四　秋の番結月のゑう志ゐあうきまでく〜ぬのひもこてぬぐ〜し

円六　右々ゑそう〜ま結山志ゐちをれで一日とみまふ〜ぬ月ハあ〜

円八　おりへぐとも牙を志ゐ分孫で見ふそ〜ぬ心をこそ〜たぐへてぞやか

円　かく〜ちちとるゆ川月ハきぐで新参結おきて志ゐゆきで乃ぬべき相を

円　新ゑ参ふ見へきゑと志ゐるのまゑでおりひ〜ちゆるくまて〜ゑる

円九、　名て〜志ゐおちぐいざゑち〜りん新ゑるとが思ふ人をたりやゆ〜や〜

円十　妻庭中志ゐかうひぐちゆうりせで秋番ゑ居ゑかてくさ〜ま〜

円右　ちぐ結ゑて〜うつちふら見ぐ志ゐ〜ぬくに心志ゐ秋乃新ゑ〜ねで

大方やまあ辞の志ハ志の志ぐ〜ものぐ〜いづも時下にぐ〜ふ〜ぐ〜
石をつきて後のちぐべを味ふべし。ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜ぐ〜

右八　ちくそ結ゑて〜ま〜ふ〜心乃牙ふ志ゐ行までかてくまゑふハそを志ゐ〜れで

石十二　おりやり〜志ゐわまりふ〜ちぐ志ゐを〜く新ハらひてきいむべきりのを
ら〜ふ〜ハふ〜二つ有て。一つの志ハいをゆ〜ゑちの志。一つの志ゑやを見辞し。
ま〜〜

古九　月のぐとゆるなれこゝの紅葉に袴ゆく紅を志ぞ思ふ

円十七　ちはやぶる宇治の橋守ありれを志ぞ思ふとハ思ふ年経へるまで

万八　たちぬるは花ちる里はかゝるとかゝ志一つおく日志ぞかなき

円十六　些ごろも志をおりかくまべもおき志のゝ一つ袖のゝ志ぞなく

みまくハ志ぞくでる橋ぞ

古三　あくるとし年はちぢめかく志ゝ年をかひたのきをつゝ

八世　ゝまやこの天はゝでゝとうべ志ゝそ志がみきゝとたてまつる

こゝろハ志ゝそゝでゝきる橋じゃれは橋を業にあり

古一　ゝまと志ゝ志ゝとあてまつる志がまゝ立ゝゝん山のさゝゝ

円四　ゝふゝハゝゝんゝ年はゝ日をぎいゝ志ゝとのゝまち問ふべき

円十二　ゝづゝゝはゝまゝの中山ゝゝふゝ志ゝ人をおりひゝめん

円十三　ゝゝぎつ橋ゝまはゝゝゝを志ゝを人をつゝゝのせはゝもゝん

こゝまゝハ何ものゝ下にかきて。かりゝゝの間ゝゝゝ橋し

古十一　秋の田はかにてゝ人をゝひゝゝゝゝんゝゝゝれ志もせん

円　人めゝゝゝはあゝゝもゝゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝ志もはん

円十八　月東ゝゝゝゝと人ゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ志ゝもはむ

円十九　ゝゝの玉ゝゝゝきつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ志ゝゝる

後九　ゝゝ海ゝゝきゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝ志ゝもせん

後拾五　ゝにゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ志ゝもせゝ

源氏若紫　立ゝゝ春はまゝたゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ志ゝもゝ

古十四　ゆげしあふらる秋ゆ志もうゝ秋くに出のひきけばまつそ答き

同十六　秋はゝ者をふて志もふゝふく人乃ゝゝ秋ふゝゝん

同十七　かぎり秋なゝがしく発ふくまるひゝ時志もわゝぬ秋ゆ者ゝ

同十八　いくよ志もうゝゝし系者をあそとかくうけるゝふゆひ私ゝ

辰十七　ゝゝゝち発ハかゝまゝて志もうゝゝ出れゆが思繋をあでさやきん

ゝゝゝハ者もゝつゝゝ橋ゝ但ゝけをハゝゝしくゝべき系ふ志を上ゝやを発詳ふか

ゝゝ地ゝゝ。ゝハうゝのゝゝし。ゝゝと二ゝゝたふやを発詳ゝゝハ別ゝゝ下に出ゝり

古十八　いま志ゝゝくゝゝびふゝゝあをゝゝゝかゝゝ者をたのゝゝ

ゝ発ハ古風の橋ゝて。方系ゝ例ゝゝ。系ゝ今ゝゝゝゝゝゝやゝ詳の志を

二つゝゝゝてかゝゝゝしゝきゝう

かゝゝゝ者ゝゝの志ゝゝの橋。美繋ゝハ狂ゝゝゝかゝくゝゝゝて。七の

者ゝ古風の詠ふ出せゝゝゝゝゝゝゝゝよまんゝゝ。ゝゝゝゝふゝゝふべゝ

地ふふ古ゝゝ系ゝゝくこゝゝハおのづゝゝ定まりゝゝるゝめくに入りて。ゝゝゝ出せる

橋をふゝづゝゝゝる。ハをゝくゝゝれゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝの風をよまんゝハ。

ゝゝ乃橋をよくゝゝ出ゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]千
[illegible]

我くてゐがしてゐがしてゐがし

右の外。萬葉又八古もとくいつやあ稀狂歌ぐ示あり。ゼの変
古語の移り出きる

拾六　ちき　ちと　行き秋　ちと　人の日かるまばいーぐたるせぞ家事かりるる

これハちと二つ。上ちるハ[illegible]
○強古々ナ又ちがれてと号ひ[illegible]ちを[illegible]ちを八号[illegible]ちを八花ふ
ちきちる行きとるの書せぬ拾の文書ぬ。ちを八ちとく
てそいつべるを

○あそふ毋ふちを

をべてちりーを行き。形ちを行きあぐいふちを。をりてそ行きとたてそあき
といふふ日ど。さるちふてその拾ふまを活ぐり。万葉十八の書ふちをち
を行やふちーみちーいひつぎ伝られとよるを也ちをとかてて。き

く活べり。又形古ちちふちりてそ行きあが名ふく活ちく。これをり去を行き。
とつふと金く日ーるすえ又結拾日記の頃よふ百去を行きとそハ行きとちる
てをいつり。ふふちをてそと文ひふ例ち
五の去をてその移ふちるく出せり　之

後拾四　をみをべーーあふうる世べりふ　ちを　行き。しろめくも号ひやるか那
ひ三の句ハちりてそ行きりふ。ちとくふきしかくのごくらをも又一つの拾し

右まれ形ちちナ大

万葉集　志　ちを　あきそそ結ゆきく秋定むーんるゆる人を[illegible]りとすきつ　年月　去月
こきもちの後拾きのちと日ど拾そ。人そ行き志ーもとくふきし。ひ文形古
今文和の句志ーまれと行りこきハちを行きをつ先そいつそ日ーとちる。
○風雅十三今ちを行き人のあがをかからどをきるをちきき手拾一むく
こきハ例のおごくしきべてを紫風雅ハかるみどりるるそてひふあるく

○玉拾を五

○ちをぞ　三拾巻　その移ふ出せり

○ちをてそ　みの去てを移り出きる

らく

古七　ちらくぞなちりかひくりまおい[らく]のこもくいふるさまぐふふ

拾ナ五　塩五七みてば入ゆるいそ[illegible]ふ[らく]さくさくこふ[らく]のあやき

ひかり　ひかりそ万葉に表し。七の巻古歌の新ろ出きり

まく　附ま

古十三　いそづふゆきてハきゆる袖沙石ふ[まく]ろきふいぐるれつ

日十七　おりみぐちまそみるきる衣ハかく縁るく[まく]搭き袖そ万りける

日十八　いさこくにヨが君を百ゑんをがちくや伏見社星乃万里[まく]ともを

日十七　ろくゑ社を社よせくる法乃ちぐくもふ[まく]のろきまづしぬくを

拾ナ六　家をうすみかきくひふつめるかくるづるあづさハ[まく]のほしき石ろ社

ちくべのくくぬ時を。かゆ〜に人のりを保てもいつり。ちかり表第ろハ身ひざ表ちと

ゐるれろり。七の巻古歌訳ろ出せろ。天ヨちる芸巻拾ろけ[まく]もかきて

そ形むくこ。こ巻ハらみ

しれ元がちくろり

又件のまく歌畧きてま[illegible]いつり。ふ[illegible]まろ〜きろ〜ま[illegible]ほ〜をどのくるづひし。

拾ナ十六の巻ろハふ[illegible]まくきろもよをを。

元吉素　星よきでまげもろ社んほくぎふ身ゆろ社るすもつくへ[ま]ふ[illegible]

くれを下へを[illegible]ぬをを[illegible]ぬくの浮ろハ万〜ぐろこや

きく　附 きー　きき

古十八　[illegible]　[きく]　ふあきぬおく山乃本紫にふまるゆきやきゑまし

同十九　ま[illegible]ゑれどゑのふぞハよ　[きく]　かるゑやのみぞ[illegible]　[きく]　もゑ

後三　さ[illegible]　[きく]　[illegible]衣の[illegible]ば[illegible]月日のき[illegible]　[きく]　[illegible]

古新撰　なゞ　[きく]　[illegible]

[illegible]

又[illegible]　[illegible]

ド[illegible]

かー

○かー　ハ切[illegible]辞の下に係る[illegible]ぞのや何ぞの辞あ
まば。[illegible]格の活び辞[illegible]切[illegible]下に[illegible]

古十　たゆ[illegible]　[かー]

後十六　[illegible]　[かー]

拾十九　いと[illegible]　[かー]

後拾十五　あ[illegible]　[かー]

同　ゆ[illegible]　[かー]

同十七　き[illegible]　[かー]

元浦集　[illegible]　[かー]

後拾遺 十四

おりひすは秋はいのちぞきしぬべきこの葉ふるかぜよ。かゝ

同 三

みるゝみしかりぶるこゝろかりしじ。かゝ 彼もをごりのみそぎしつまバ

同 十六

もしこそ時雨やそこなりけん秋のよもきて。かゝ 桔のとばりをぐふ

千十七

くゆきもこゝろ高の外ぞ。かゝ とふこもんあり〜家はつゝりあ

新一

こえこ。かゝ 梅さかりぬるが宿ゆうこれも人をうにてそよれ

しせ物語

こゝしくばきてこもんよ。かゝ ちやぬる神のつきもこゝろ拾くれ

大和物語

ちて春きみこゝもこ。かゝ 春乃ちくきりのこゝや思ひいづべき

○元輔集に手ふき合はせ紅葉かけ元てもおそつちゝ〜ぞこゝ〜ぬかゝ。光

ハ上よぞといへどぬかゝ。ぬかゝとふべきぬかゝといふハぞの結び詞ふ

後拾遺 十七

こへ。かゝ あかくよこもけ〜じあの外を志げ〜も志れ紫みやかくこと

新八

こへ。かゝ あかゝ〜しく花のちゝもこゝふをこゝのかゝ秋の袖ざ先を

かくのおく〜下へおを保てもいつゝ。又侯松中納言拍俗の何みハかゝ〜やとやを

保ていつゝこゝろもこゝ

初学抄ゝりがく。こんよかゝ〜こへかゝ〜おどいつゝ生ゞびのおゝきにこゝひ

て。かゝ〜ハ〜で形ゆこゝの詩ぞこのこゝんはこゝハおゝゞこゝ。おゝ〜引こゝ

ゞを社中にこ。形ゆこゝこゝふあゝざこゝを多きをゝふべ〜又文章ふハ

社ふ世ゆこゝたゝき中に。きかゝ〜ぞかゝ〜こかゝ〜つかゝ〜ふかゝ

こんかゝ〜きんかゝ〜きゞこゝ法ゆこゝいつゝ生ゆ。

慶應義塾大学図書館